

遭った時でも、一つ一つ様々な事に対応できるようにお通り下されたのが、ひながたなのです。ですから、ひながたの道を通れないということでは、どうもならないと仰られているわけがあります。

ひながたとは何か、それは人生のどんな苦しい辛い局面になっても、陽気ぐらしの道を歩めるよう、只々子供可愛いという思いで、教祖が自ら難儀の中を通過して、お手本を見せて下さったのです。

まず一つ目、貧に落ち切るでありませぬ。何故教祖が真先に貧のどん底へ落ち切る道を急がれたのか、それは親神様が「貧に落ち切れ。貧に落ち切らねば、難儀なる者の味が分からん。」こう仰せられたからであります。

中山家が貧に落ちていく10数年の過程で、まずされたのは施しであります。貧に落ち切れとの親神様の思いのまま、嫁入りの時の荷物を始め、食べ物・着物・金銭に至るまで、次々と困っている人に施しを続けられ、遂に中山家の蔵は空になってしまいました。そして教祖は「この家へやって来る者に、喜ばさずには一人

もかえされん。親のたあには、世界中の人間は皆子供である。」と仰せられ、親が子供を思うのと同じように、困っている人達を救げずにはいられないという思いで、どれだけ自分の家が貧のどん底に落ち切っても、施しを貫かれるのでした。教祖伝には「物を施して執着を去れば、心に明るさが生れ、心に明るさが生れると、自ら陽気ぐらしへの道が開ける、と教えられた。」と書いてあるように、欲を忘れることで喜びが生まれることを、自ら通って教えようと言われたのです。

続いて、家形・高塀の取り払い、そして夫善兵衛様の苦悩であります。ある日教祖は「この家形取り払え」と言われました。家形とは、住居や屋敷のことで、もちろん善兵衛様は承知をしないでおりまして、教祖は20日間も食事をとらず寝込んでしまわれまして、それから南東から瓦を下ろせと言われ、仕方なく下ろすと、教祖の身上は忽ち良くなり、少し経つとまた身上が悪くなる。今度は北東の瓦を下ろせと言われ、親戚の強い反対はあったが止むを得ず下

ろすと、教祖の身上はすぐ良くなる。更には日が経ったある日、今度は家の高塀を取り払えと仰せられたが、この高塀とは家の周りがある塀ではなく、屋根の高い所にある、家の格式を表すシンボルなので、親戚や周りの人達は猛反対をしたわけでありませぬ。しかし善兵衛様は、教祖が苦しまれるのを見ているのが余りにも辛いあまり、高塀を取り払ってしまいました。そして

遂にこの事を機に、親戚一同不付き合いとなったわけでありませぬ。こんな事が続いたので、善兵衛様はある夜には教祖に「憑きものならば退いてくれ」と刀をかざして、涙ながらに枕元に立った事さえありませぬ。こうした中、教祖も、夫が苦しんでいる姿を見て辛くなり、いつそのこと自分さえ居なくなればと思ひ、近くの池や井戸に身を投げようと思ひますが、その度に親神様に「短気を出すやない」と止められたのであります。しかし、このことさえもよく考えますと、一見、善兵衛様と教祖の夫婦間の感情の中で、起きた出来事の様

がたを通し、神一条の道を求めて歩む時には必ず突き当たる葛藤や板挟みの苦しみの道を自らが通り、後々の我々が信仰を通る上での参考として示して下されたのです。

そして、もう一つ、現代の我々が参考にさせて頂きたいのは、善兵衛様の御態度であります。近辺の家々はおろか、親戚一同まで不付き合いになつても教祖をとられたわけでありませぬ。教祖が神様なので言う事にしたがったという事もあるかもしれませんが、善兵衛様はいざなぎのみことの魂をお持ちであると同時に、底なしの愛情を持って教祖とお子様を守り抜いてこられたのだなと感心させて頂くのです。特に教祖を守り抜いて来られたのではないのでしょうか。

められた教祖のその後の道すがらと、お道の発展していく状況を見る時、どんなことが起きていそいそとお通り下された姿は、まさに心に明るさと勇みを持つことができるのです。

そして、善兵衛様のお出直しとこかん様の大坂布教であります。嘉永6年2月22日、善兵衛様は66歳で出直されました。教祖伝には人一倍愛情も細やかに親子夫婦の仲睦まじく暮らしてきた一家の大黒柱、善兵衛様の出直しに、いよいよ家族の悲嘆は一人に深いものがあつたと書かれています。今まで教祖とお子様一人で守り抜いてこられた一家の大黒柱を失った家族の悲しみは大変なものがあつたわけでありませぬ。そんな大節の中、教祖は17歳になったこかん様へ、大阪の街へと神名流しに出かける様に仰せられました。こういう大節こそ嘆き悲しんでいるよりも、積極的に足を一歩踏み出して親神様の御用に勇まらせて頂く事で、人生は広げてくると節に対してどう対処するかを教えて下さっているのです。事実、このこかん様が神名流しで通られた道